毛野中世の武士団と千利休への系譜

新田、足利、里見、田中の系譜

山名、世良田、額戸、中里見、岩松一代のみ

参考資料

〔1〕田中の系譜　(1) 新田町教育委員会の資料　(2) 浅田晃彦著 上州茶の湯史話より引用
〔2〕新田の系譜の原点　(1) 鈴木真年著－新田族譜　(2) 真下和雄著－新訂新田族譜
〔3〕尊卑分脈　〔4〕寛政重修諸家譜　〔5〕群書類従　〔6〕群書系図部集
〔7〕群馬県茶道会刊 昭和54年発行 上州茶の湯史話 浅田晃彦著より
〔8〕系図纂要第8冊-上　平氏 (2) 名著出版

◎浅田晃彦著 上州茶の湯史話の出典は新訂新田族譜(真下和雄著)より引用
◎延文5年（1360年）の頃の新田の庄は岩松氏が支配していた。従って「利休に繋がる系譜として岩松氏を考える必要はない」と真下氏より提言を受けた。
◎上記系図纂要（資料8）の平氏（2）の系図平朝臣姓（三浦流）の35頁下段に「雑々拾遺　千二郎左衛門義次子孫　千宗易云々」とあるが資料として裏付けに欠けるため、信憑性がない。
◎系図として不確かなところがあるが、今回の目的から外れているため、そのままの記録にとどめる。ご寛恕の程を。

◎上州茶の湯史話によると氏政の四人の男子の内、田中に残ったのは政綱のみ。長慶寺にある宝篋印塔は政綱の子、時綱の時代のものである。この塔を造った三年後に時綱は旧領安堵されているのをみると一族の命脈を保ったのは政綱であろう。

源
義家
義国
義親
五世の孫頼朝
鎌倉幕府1183年～1333年
義重 新田
義康 足利
利休の祖
二代
義兼
義兼
義範 山名
義季
経義 額戸
世良田 徳川の祖
子孫十一ケ国の大名
里見 義俊
1170年光明寺に葬る
三代
義房
義氏
義雅
義成
義清 田中
長慶寺を菩提寺にして鎌倉に仕える。
政氏 中里見
田中の祖
四代
政義
泰氏
重政
義基
義宗
重経
五代
基氏
頼氏
義宗
忠義
重基
義秀
氏義 鎌倉時代 宮田不動尊を作る。
六代
家時
義胤
時義
義貞
経村
義房
重村
七代
貞氏
義胤
義連
古文書の頼阿
親子で所領を寄進
経氏
政経
女
頼阿の娘
氏政
義貞と戦死
八代
高氏
基義
家兼
政綱
宗村
義貞と戦死
西国へ逃れる。
親経
義貞と戦死
政選
周防の大内氏に仕える。
九代
家基
政景
姓を小沢に改める。
弘政
十代
家基
氏選
上野に戻り下里見に住む。
十一代
家房
小幡氏に仕える。
満親
●南北朝時代　一三三六年～一三九二年
●長慶天皇　一三四三年～一三九四年（百科事典）
●田中山宝光寺　後に長慶寺となる。
安房の里見の祖
政綱
永和二年丙辰八月二日逆修　得阿弥とある。（一三七六年）
千利休家との接点
時綱
経勝
経世
経忠
経久
経友
利休
時綱の傍系とおもわれる。
千阿弥に近い縁者？応仁の乱（一四六七～六九年）に討死にしている。
1522年堺で生まれる。1591年没。
この宝篋印塔を造って氏満に臣従を誓ったのでは？
母と田中で暮らす

新田尼
女
義純
時兼
岩松 太郎
時明 田中民部大輔
田中 次郎
時国
満国 孫太郎
頼国 三郎
胤国 小二郎
頼基 余二
泰家 四郎
明氏 五郎
経氏 五郎太郎
この経氏の寄進状は後の氏女の「親父頼阿」と比定されると思うとある。（新田荘における館と寺と墓の358頁6行より～）新田教委
義顕 尊良親王と共に延元二年戦死。
義興 第二子はかられて多摩川六郷矢口の渡で自殺 一三五八年没
義宗 足利氏満に討たれる。一三五二年兄義興、従兄脇屋義治と上野で挙兵
貞方 (殺害される)
貞氏 (出家)
義貞 1301年～38年敗死す。北条を滅ぼす。越後の守護、越後の守。播磨守、上野介。◎南朝を奉じて戦う。
一三三三年五月八日生品神社にて旗挙げ
朝氏
直義
尊氏
直冬
高氏 初代将軍1305年生まれ1338～58年迄将軍を務める。
義栓
義満
義持
義量
義教
義勝
義政 八代 1436～90年 千阿弥の時代 応仁の乱の時代
義尚 九代 文明の乱の時代
基氏 関東管領 初代
氏満 二代
満兼 三代
持氏 四代
成氏 五代
政氏 六代
高基 七代
晴氏 八代
古河公房 この末明治まで続く。
時綱（足利に）出仕に成功。山名氏に助力求めるか？
一三九八年～一四三九年の人
二代 三代 四代 五代 六代 七代
貞頼
家時
貞氏
義氏
泰氏
頼氏
義氏
義純
義兼
義重 新田
義康 足利